

12
13
14
15
16
17

1 III. ベクトル

2

3 8. ベクトルとベクトルの代数

4 **大きさ**と**方向**を持つ量であるベクトルとその計算について復習する・

5

6 8.1 ベクトルとスカラー

7 スカラーとは**大きさのみ**を持つ量のことである。一方、ベクトルは大きさと方向を持つ
8 量である。ベクトルは定義される空間の次元と同じ数の成分を持つ。3次元空間の場合
9 には、

10
$$\mathbf{a} = (a_1, a_2, a_3) \tag{8.1}$$

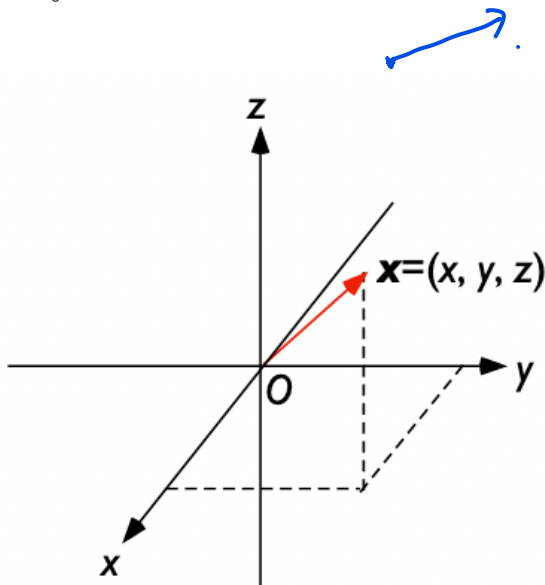
11
$$\mathbf{a} = (a_x, a_y, a_z) \tag{8.2}$$

12 のように書くことができる。第I章で述べたようにベクトルは太字や矢印付き記号で表
13 す。特に、始点を原点に持つ位置を示すベクトルは**位置ベクトル**とよばれる。ベクトル
14 の**大きさ**は三平方の定理より、

15
$$a = |\mathbf{a}| = \sqrt{a_1^2 + a_2^2 + a_3^2} \tag{8.3}$$

16 となる。

17



18

19 図8.1 位置ベクトル

20

21 8.2 基本ベクトル

22 座標軸と同じ方向の単位ベクトルを基本ベクトルという。すなわち、

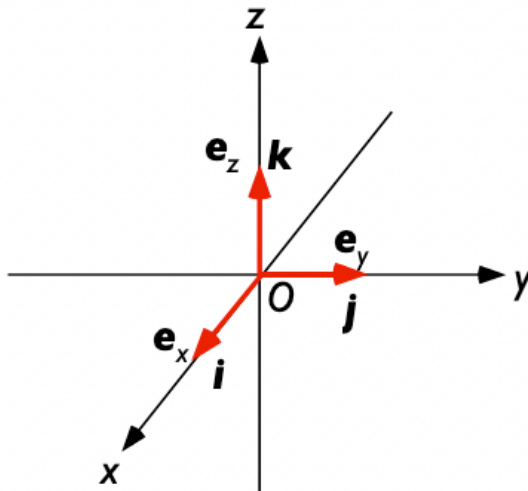
23 $\bullet i = (1,0,0)$ (8.4)

24 $\bullet j = (0,1,0)$ $a = a_1 i + a_2 j + a_3 k$ (8.5)

25 $\bullet k = (0,0,1)$ (8.6)

26 である。 i, j, k のほか、 e_1 や e_x 等で表すことも多い。デカルト座標系では基本ベクトル
27 の向きは同じであるが、曲線座標系の場合、場所によって方向が異なる。

28



29

30 図8.2 デカルト座標系の基本ベクトル

31

32 8.3 零ベクトル

33 大きさが0のベクトルで、大きさだけでなく、方向も持たないベクトルである。単に0
34 で表す。

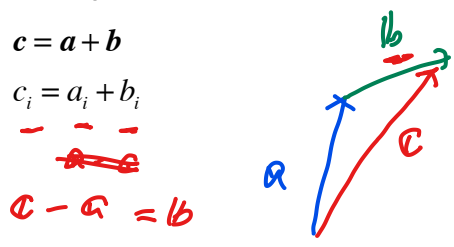
35

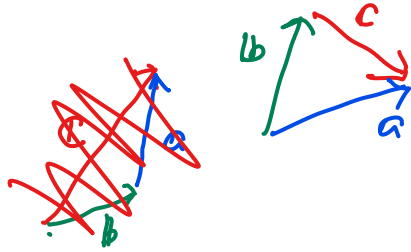
36 8.4 ベクトルの代数

37 \bullet ベクトルの和と差

38 $c = a + b$ (8.7)

39 $c_i = a_i + b_i$ (8.8)





40 $c = a - b$ (8.9)

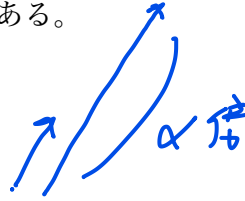
41 $c_i = a_i - b_i$ (8.10)

42 すなわち、ベクトルの成分それぞれの和と差である。

43 ・ベクトルのスカラー倍

44 $b = \alpha a$ (8.11)

45 $b_i = \alpha a_i$ (8.12)



46 それぞれの成分の α 倍である。つまり、方向が同じで大きさが α 倍となる。

47 ・演算法則

48 $a + b = b + a$ (8.13)

49 $a + (b + c) = (a + b) + c$ (8.14)

50 $\alpha(\beta a) = \alpha\beta a = \beta(\alpha a)$ (8.15)

51 $(\alpha + \beta)a = \alpha a + \beta a$ (8.16)

52 $\alpha(a + b) = \alpha a + \alpha b$ (8.17)

53 (8.13)は交換法則, (8.14)と(8.15)は結合法則, (8.16)と(8.17)は分配法則である。

54

55

56 9. ベクトルの積

57 9.1 ベクトルの内積

ベクトル × ベクトル → スカラー 内積
 → ベクトル 外積
 → テンソル 直積

58 ベクトルの内積はスカラー積ともよばれる。内積は、

59 $a \cdot b = |a||b|\cos\theta$ (9.1)

60 と定義される。この定義から、内積が、1つのベクトルへの射影を作り、その射影の長
 61 さと射影されるベクトルの長さを掛けた値であることが分かる。基本ベクトルの内積は

62 定義から、 $\cos\theta = 1$

63 $i \cdot i = j \cdot j = k \cdot k = 1$ (9.2)

64 $i \cdot j = j \cdot k = k \cdot i = 0$ $\cos\theta = 0$ (9.3)

65 となる。内積はベクトルの成分を用いて

アインシュタインの理論

66
$$\underline{a \cdot b} = a_1 b_1 + a_2 b_2 + a_3 b_3 = \sum_{i=1}^3 a_i b_i = a_i b_i \quad (9.4)$$

67 と表される。 *work*

68 内積の例として 仕事 がある。仕事は、力 F が一定で、動きが直線るとき、 l を始点と
69 終点を結ぶベクトルであるとする、

70
$$W = \underline{F \cdot l} \quad (9.5)$$

71 と表される。この式から、仕事が力の l 方向の大きさと動かした距離の積であることが
72 分かる。 F が一定でない、あるいは運動が直線でないときには、変位を微少とすること
73 により、

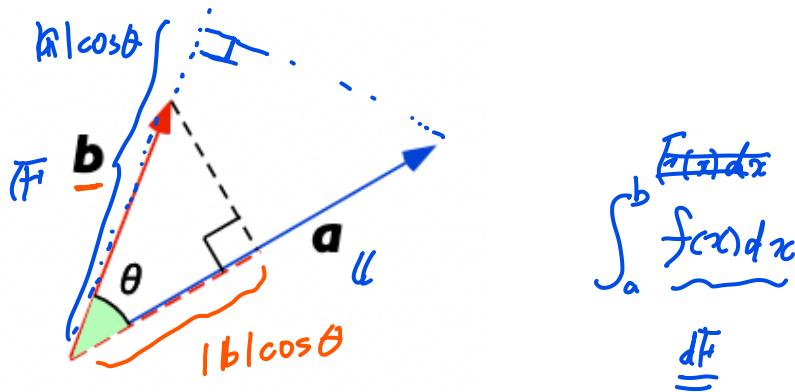
74
$$\underline{dW} = \underline{F \cdot dx} \quad (9.6)$$

75 始点 r から終点 q まで積分することにより、

76
$$\underline{W} = \int_r^q \underline{dW} = \int_r^q \underline{F \cdot dx} \quad (9.7)$$

77 が得られる。この積分については積分の章で説明する。

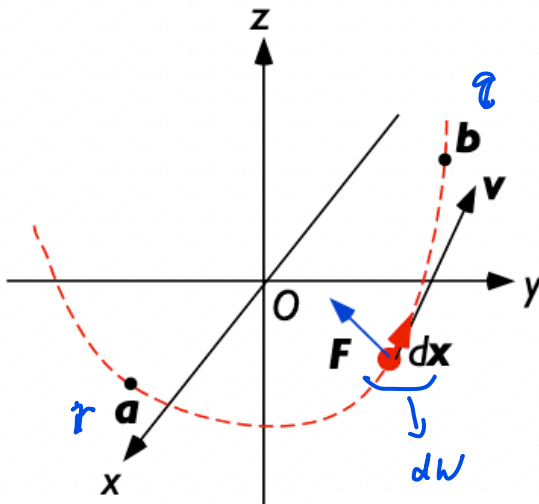
78



79

80 図 9.1 ベクトルの内積

81



82

83 図 9.2 力と仕事。

84

85 9.2 運動エネルギーと仕事：力学的エネルギー保存則

86 運動方程式 ニュートン第2

$$87 \quad m \frac{dv}{dt} = F \quad (9.8)$$

88 の両辺に速度を掛けて内積を作ると、

$$89 \quad m \frac{dv}{dt} \cdot v = F \cdot v \quad (9.9)$$

90 となる。dtを両辺に掛けて

$$91 \quad \underline{mv \cdot dv = F \cdot v dt} \quad (9.10)$$

92 さらに、

$$93 \quad \underline{\frac{dx}{dt} = v} \quad v dt = dx \quad (9.11)$$

94 を考慮すると、

$$95 \quad \bullet \quad mv \cdot dv = F \cdot dx \quad (9.12)$$

96 となる。この式を始点 r から終点 q まで積分する。

$$97 \quad \int_r^q mv \cdot dv = \int_r^q F \cdot dx \quad (9.13)$$

98 積分を実行すると、 W

$$v \cdot v = v^2$$

$$99 \quad \left[\frac{1}{2}mv^2 \right]_r^q = W \quad (9.14)$$

100 始点 r から終点 q における速度をそれぞれとすると,

$$101 \quad \frac{1}{2}mv_q^2 - \frac{1}{2}mv_r^2 = W \quad (9.15)$$

102 ここで,

$$103 \quad T = \frac{1}{2}mv^2 \quad (9.16)$$

104 は運動エネルギーとよばれる量である。 T を用いると,

$$105 \quad T(q) - T(r) = W \quad (9.17)$$

106 となり, 運動エネルギーの変化は与えた仕事 W と等しいことを表す。

$$107 \quad W = 0 \quad (9.18)$$

108 のときはエネルギーの変化が零, すなわちエネルギー一定となる。この関係は力学的エ
109 ネルギー保存則とよばれる。

110

111 9.3 ベクトルの外積

112 ベクトルの外積は, ベクトル積ともよばれ, 次のように定義される。

$$113 \quad \bullet \quad \mathbf{a} \times \mathbf{b} = |\mathbf{a}||\mathbf{b}|\sin\theta \hat{\mathbf{c}} \quad (9.19)$$

114 ただし, $\hat{\mathbf{c}}$ は \mathbf{a} と \mathbf{b} に垂直で, $\mathbf{a} \rightarrow \mathbf{b}$ に右ねじを回したときに進む方向を向く単位ベク
115 トルである。その大きさは2つのベクトルで作られる平行四辺形の面積と等しい。基本
116 ベクトルの外積は定義より,

$$117 \quad \mathbf{i} \times \mathbf{i} = \mathbf{j} \times \mathbf{j} = \mathbf{k} \times \mathbf{k} = 0 \quad (9.20)$$

$$118 \quad \mathbf{i} \times \mathbf{j} = \mathbf{k}, \mathbf{j} \times \mathbf{k} = \mathbf{i}, \mathbf{k} \times \mathbf{i} = \mathbf{j} \quad \mathbf{i} \rightarrow \mathbf{j} \rightarrow \mathbf{k} \rightarrow \mathbf{i} \quad (9.21)$$

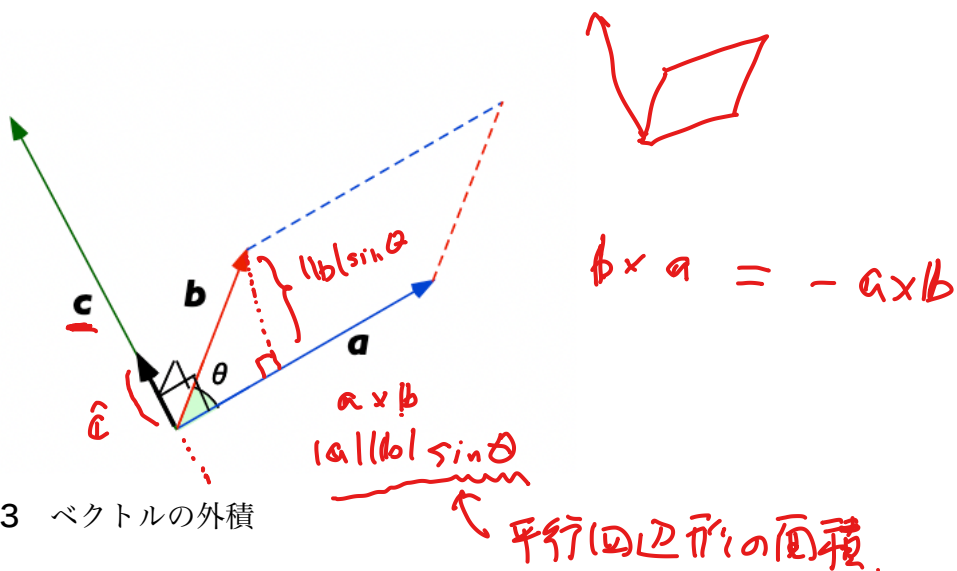
$$119 \quad \mathbf{j} \times \mathbf{i} = -\mathbf{k}, \mathbf{k} \times \mathbf{j} = -\mathbf{i}, \mathbf{i} \times \mathbf{k} = -\mathbf{j} \quad (9.22)$$

120 となる。これを利用して, 外積は成分を用いて

$$121 \quad \mathbf{a} \times \mathbf{b} = \begin{pmatrix} a_2b_3 - a_3b_2 \\ a_3b_1 - a_1b_3 \\ a_1b_2 - a_2b_1 \end{pmatrix} \mathbf{i} + \begin{pmatrix} a_3b_1 - a_1b_3 \\ a_1b_2 - a_2b_1 \\ a_2b_3 - a_3b_2 \end{pmatrix} \mathbf{j} + \begin{pmatrix} a_1b_2 - a_2b_1 \\ a_2b_3 - a_3b_2 \\ a_3b_1 - a_1b_3 \end{pmatrix} \mathbf{k} \quad (9.23)$$

122 と書くことができる。

123



124

125 図 9.3 ベクトルの外積

126

127 9.4 力のモーメントと角運動量の保存

128 ニュートンの運動方程式,

129
$$m \frac{dv}{dt} = F \quad \frac{dv_x}{dt} i + \frac{dv_y}{dt} j + \frac{dv_z}{dt} k \quad (9.24)$$

130 は運動量

131
$$p = mv \quad \frac{dv_x}{dt} i + \frac{dv_y}{dt} j + \frac{dv_z}{dt} k \quad (9.25)$$

132 を用いると,

133
$$\frac{dp}{dt} = F \quad \odot \quad \otimes \quad (9.26)$$

134 とあわらされる。上式に位置ベクトル r を左側から掛けて外積を作ると,

135
$$r \times \frac{dp}{dt} = r \times F \quad \sin \theta = 1 \quad r \times mg = r mg \hat{e}_z \quad (9.27)$$

136 となる。右辺の量

137
$$N = r \times F \quad (9.28)$$

138 は力のモーメントとよばれる量である。いま、位置ベクトルと運動量の外積 l を考える。

139 すなわち, $l = r \times p$

140
$$l = r \times p \quad (9.29)$$

141 である。 l は角運動量とよばれるベクトル量である。ここで、 l を時間で微分すると,

142
$$\frac{dl}{dt} = \frac{d}{dt}(r \times p) = \frac{dr}{dt} \times p + r \times \frac{dp}{dt} = v \times mv + r \times \frac{dp}{dt} = 0 + r \times \frac{dp}{dt} \quad (9.30)$$

143 となるので、(9.27)の左辺に一致する。つまり,

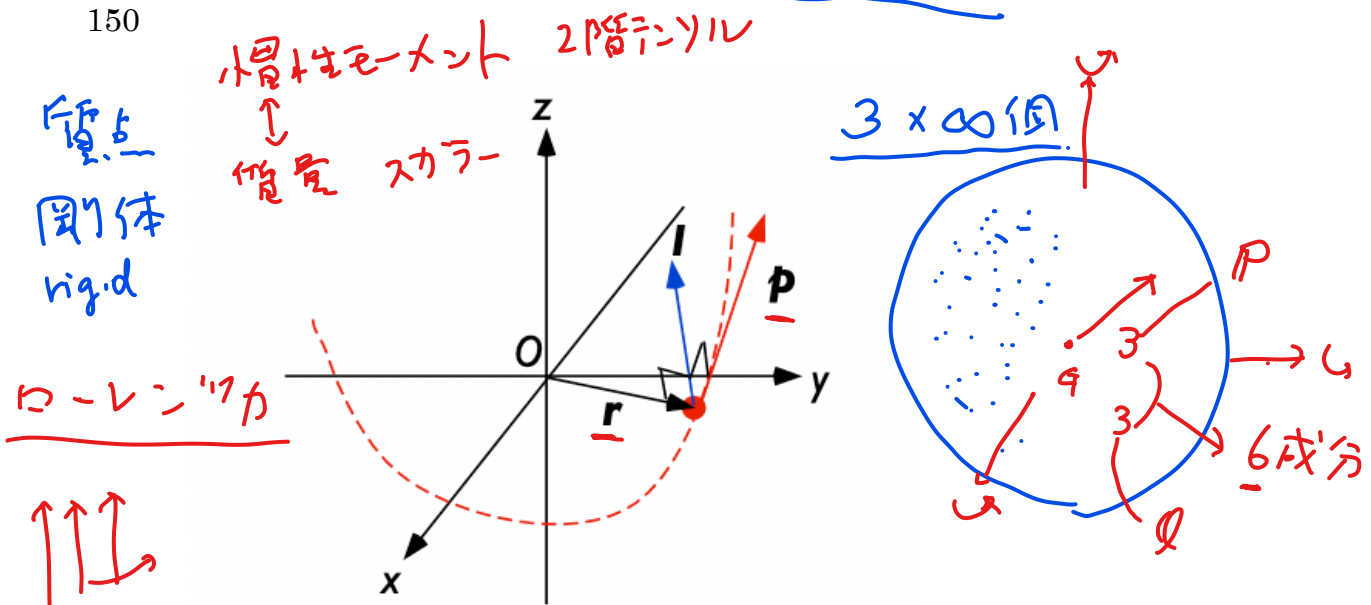
144
$$\frac{dl}{dt} = N \tag{9.31}$$

145 が成り立つ。力のモーメントに比例して角運動量が増加することを表す。特に、
 146
$$N = 0 \tag{9.32}$$

147 のときは、
 148
$$\frac{dl}{dt} = 0 \tag{9.33}$$

149 となり、角運動量が一定となる。この関係は角運動量保存則とよばれる。

150



151
 152 図 9.3 角運動量。l は r と p 両方に垂直である。

153
 154 9.5 ベクトルの直積

155 ベクトル a の i 成分と b の j 成分から作る積を直積(ダイアド)よび、それを ij 成分とする
 156 2階テンソルをダイアディックという。つまり、

157
$$\underline{a} \otimes \underline{b} = \underline{a} \underline{b}^T = \sum_{j=1}^3 \sum_{i=1}^3 a_i b_j \mathbf{e}_i \mathbf{e}_j = a_i b_j \mathbf{e}_i \mathbf{e}_j \tag{9.34}$$

158 である。ここで、右辺の a は列ベクトル、b^T は列ベクトルを表している。基本ベクトル
 159 の直積は

転置

$P_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix}^T$ transpose

160 $i \otimes i = e_1 e_1^T = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ (9.35)

161 $i \otimes j = e_1 e_2^T = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ (9.36)

162 などである。つまり、ダイディックの成分は

163 $(a \otimes b)_{ij} = a_i b_j$ (9.37)

164 で表される。

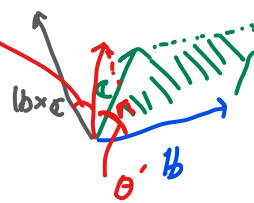
165

166 9.5 ベクトルの三重積

167 3つのベクトルから作られる積

$a \rightarrow b \rightarrow c$

168 $a \cdot (b \times c) = b \cdot (c \times a) = c \cdot (a \times b)$ (9.38)



169 をスカラー三重積という。スカラー三重積は3つのベクトルが作る平行6面体の体積を

170 表す。また, $|a| |b \times c| \cos \theta = |a| |b \times c| \sin \theta'$

171 $a \times (b \times c) = (a \cdot c)b - (a \cdot b)c$ (9.39)

172 をベクトル三重積とよぶ。(9.39)に

173 $a \times b = -b \times a$ (9.40)

174 を用いると,

175 $(a \times b) \times c = (a \cdot c)b - (b \cdot c)a$ (9.41)

176 が導かれる。(9.39)と(9.41)から,

177 $(a \times b) \times c \neq a \times (b \times c)$ (9.42)

178 が分かる。すなわち、ベクトル三重積に対して結合法則が成り立たない。(9.39)を用い

179 ると,

$a \rightarrow b \rightarrow c$

180 $a \times (b \times c) + b \times (c \times a) + c \times (a \times b) = 0$ (9.43)

181 が成り立つ。この関係はヤコビの恒等式とよばれる。